

NARUTO
unofficial fanbook
Kakashix Iruka

童貞だって

言ったじゃないか!

Caution!

R18

ADULT
ONLY

NARUTO
unofficial fanbook
Kakashix Iruka

童貞だって

言ったじゃないか!

Caution!

R18

ADULT
ONLY

童貞だって言ったじゃないか！

みたいわ南国



この本は、個人製作、非公式のファンブックです。
原作者様・出版社様とは一切関係ありません。

二次創作をご存じない一般の方や、

関係者様の目に触れぬようご配慮をお願いします。

また、十八歳未満の方の閲覧は固くお断り致します。

童貞だつて言つたじゃないか！

「あのときは出すぎた真似を、申し訳ありませんでした!」

サスケが里を抜け、ナルトは自来也と修行の旅に出た。木の葉崩しで動揺した空気もようやく落ち着き始めた頃、イルカはカカシに自分から声をかけ、己の過ちを詫びていた。

ずっと気に病んでいたのだ。中忍試験への推薦を確認する場で、イルカはカカシに食ってかかっていた。曰く、まだ早すぎると。ナルトたちの将来を潰す気なのかと。

しかしカカシは冷静に、イルカの言葉をはつきりと否定した。そのときは確かに憤りもしたが、結果から見れば答えは明白で、子供らの成長ぶりを軽く見ていたのはイルカの方だった。カカシは正しかったのだ。

イルカは自身の甘さを恥じ、謝罪の機会を窺っていた。小さいさかいではあったが、それを放置して平気な顔をするのはどうしても嫌だった。あまりにも大きな災厄が里に降りかかり、三代目が殉じたあともその気持ちちは消えず、やっと今になっての行動になったというわけだ。

第七班が離散した以上、はたけカカシの上忍師としての職務はなくなつた。また、里一番のエリート上忍である彼への任務は火影から直接命じられるものも多く、報告書を携えて受付にやってくることもさほどない。だからこそ、珍しく受付所に来て来たカカシへ、イルカは勇気を出して声をかけたのだった。

受付業務中に離席する融通を同僚たちに利かせてもらい、カカシを伴って中庭へと移動する。人目を避けるためだ。

そうして、己の非礼を率直に謝つた。まっすぐに頭を下げたことで、背筋の伸びた上半身と、地面との角度は平行だ。この程度のことですすしを得ようと狙つたわけではないが、できる限りの誠意を見せたいと思えば自然と身体が動いていた。

「わ……、わ、頭を上げてください、イルカ先生!」

カカシがうるたえた声を出しても、イルカはなかなか頭を上げない。たつぷり一分間経つてようやく姿勢を直したときには、カカシは心底ホツとした様子だった。

「本当に申し訳ありませんでした。カカシさんの仰ることが正しかった。甘いのは、俺の方だったんです!」

「ああ……、いやその、当たり前ですけどオレだってこうなるって分かつて言つたわけじゃないんですよ。うまくいくんじゃないかな、と思つただけで……。こちらこそ、言い訳させてもらえるんなら、イルカ先生に聞いて欲しいことがあつて。

……その、ここじゃないので、どうです、今夜にでも。お時間あるようでしたら、夕飯を一緒に!」

「え?」

イルカはきよとんと、白目がちな瞳を丸くした。格下の人間

から格上の人間へ素直に謝らせてもらえれば上々、今更こんなことを蒸し返しているのだからスルーされても仕方がないし、なんなら一言二言罵られてもやむなしと考えていたのだ。それが、謝罪を受け止めてくれたうえ、食事に誘ってくれるだなんて。

さすが上忍、いや違う、さすが、あの三代目がナルトの師へと選んだ方。イルカの胸に、じわりと温かいものが広がった。ああ、苦労はしただろうがあの子はこんなにも、素晴らしい縁を持つことができたのだ。

「……もちろんです、喜んで！」

彼女がいるっていうのでもないですしいつでも空いてますよ、今日は早番なんで十九時には上がります、とややはしゃいで伝えたなら、カカシもにつこりと微笑んでいるように見えた。口布があるので確信はできないが、きつとそうだとイルカは思った。今晚は楽しい夕食になりそうな気がして、今からわくわくしてしまふ。

予感的中し、その夜以降ふたりは、共通の教え子を持っていた知人、から、個人的に親しい友、へと関係を变えていったのだった。

カカシと楽しく酒を酌み交わしながら、ナルトには感謝しなくてはいけないなあ、と、イルカは思う。

あの日の謝罪劇から今日まで、彼と何度夕食を共にしただろう。もともと他人との距離が近くなりがちなイルカであるが、階級違いの上忍とここまで親しくなれたことはない。今となつては軽口も叩くし、カカシの好物や、天ぶらが苦手だなんて細かなことまですっかり覚えてしまっていた。

『あなたに聞いて欲しいことっていうのはね、これはもう本当今からだと言い訳にしかならないんですけど』

『オレね、悔しかったんですよ。だってあの子たち、イルカ先生ならああだった、こうだったって、いつつもいつつもあなたのことはしっかり話すんですもの。いちお、オレが上忍師なのね』

『いえ分かってるんですよ。あなたの温かな人柄が子供たちに物凄く慕われていて、今回初めて指導する立場になった新米のオレなんかじゃ、全然あなたには敵わないんだって。ちゃんと分かかって、だからこそ悔しくついで、あんなに意地の悪い

言い方を』

『大人げなかつたです、すみませんでした。自分の力量不足を棚に上げて、あなたにひどい態度をとって。たいがいのごとはどうにもならないからって受け流せるんですけど、子供らのことは、ほら。生死にも関わりますし、オレが伝えられることは全部伝えてあげなくちゃって、力みすぎちゃってたと言いますか……』

『とにかく、ごめんなさい。オレが勝手に空回ってて、あなたに八つ当たりしたみたいなんなんです』

あの夜、居酒屋の席でべこん、と頭を下げ、なかなか顔を上げてくれなかつたカカシのことを思い出す。

その日の昼に、イルカも彼に対して同じことをやったわけだが、上忍であるカカシからそれをされたときには本当に焦った。わたわたしている、『ほんとにごめんなさいね、イルカ先生』と重ねて詫びを入れられ、例の言い合いのわだかまりなんてなにもかも吹っ飛んでしまった。こんなにも潔い、きちんとしたいいひとがいるのかと、逆に好感度が爆上がりしてしまつたくらいだ。

飄々としてはいるものの、穏やかで、自然と気遣いのできるカカシとの時間は本当に心地良い。

馬が合うとはこのことかと、目の前の美丈夫を見つめつつ思

う。いわゆる飲み友達、のようになってから、彼はイルカの前で口布を外すようになっていた。その下の美貌に驚くのと同時に、特別な扱いを受けたように感じて、妙に面映ゆくなつたものだ。

「ん、なあに？ まーたオレの顔眺めちゃって、イルカ先生」「あーすいません。だつてすごいイケメンなんですもん！ ついね、つい。カカシさんだつて桁違いの美人がそこらを普通に歩いてたら、やつぱりちよつと見ちゃうでしょ」

「ええー？ うー……」

困つたように言いながら、その実カカシが上機嫌なのはすぐ分かつた。こうして子供みたいにじやれ合う時間をイルカは楽しんでたし、カカシもきつとそうなのだと思つている。

一緒に飲みにも思つても多忙な上忍に気安く声などかけられないのだが、カカシの方から頻繁にイルカを誘ってくれるのだ。

任務明けに時間が空くと、カカシはアカデミーや受付所にぶらりと現れて、今日どうですかなんて聞いてくる。だいたい二つ返事で出かけられる時間帯に打診があるのだがたまたま少し残業があつたりすると、じゃあお邪魔にならないようにこの辺で大人しくしてますね〜などと言つて静かに座つて待つて

いるのである。そんな光景滅多にお目にかかれるものでもない
ので、「お前上忍待たすとかどんな中忍だよ」と職場でだつて
からかわれる始末だ。

「そりやまあ、見るか見ないかって言つたらちらつとぐらい見
るかもしんないですけどね。ま、でもそれつて単なる興味つて
だけで意味なんかないんですよ。言つたじゃないですか、オレ
そういうの疎いんだつて」

「まーたまた。里一番のエリートで？ 他国のピンゴブックに
載るくらいの業師で、稼ぎも良くて。おまけにその色男っぷり
でしょう？ 謙遜なんてね、俺にはしなくつたつていいんです
よカカシさん！ もちろん羨ましくはありますが、そんなこ
と妬いたりしませんつて。あなたがすごいひとだつて、俺ちゃ
んと分かつてますもの！」

「いやだから、うーん……」

カカシががりがり頭を搔く。困つたときの、彼の癖だ。し
がない中忍教師の懐を痛めない程度の安い居酒屋、そのざわめ
きのなかでイルカはおやと首を傾げていた。

イルカの言葉は本心からのもので、やつかみなどしていない。
事実、イルカはカカシを尊敬していた。階級が上の忍は無論み
な尊敬に値するのだが、彼はまた別格だった。

年齢がいく、プラス立場が上の方になるとなかなか他人に謝
るなんてできない人間が増えてくるわけだが、カカシはそんな
ことちつとも関係なく、自分が悪かつたと思えば格下の忍にだ
つて謝れるのだと、イルカはもう知つている。

また、雑談から垣間見える彼の指導は非常に素晴らしく、子
供たちが自分の力で成長できるような心を砕いているのが伝わ
つてくるし、なによりも仲間の大切さを、里を大切にすることに
を何度となく伝えてくれている。その姿勢に、イルカは強く共
感していた。誠実で、もちろん強くて、子供思いの、立派なひ
と。もしかしたら次の火影に相応しいのはこのひとではないだ
るうかと、密かに思わずにはいられない。そういう目で彼を見
ているのは、きっとイルカだけではないはずだ。

そのカカシが、この銀髪的美男子が、女にモテないわけがな
いのだ。周りが見とれるくらいの美女に言い寄られていること
ろを、何度か見かけたこともある。

「オレほんとに、そういうの……ないんですつて。色々しんど
いこともありましたが、人を好きになつたりとか、……：……：そ
ういふ気分になれない時期が長くて。いつの間にかこんな年に、
……：……：ね」

「あ……」

「だから、逆に羨ましいんです。好きになつたひとと付き合つ

たりとか、一緒にいたりとか、そんな経験があるのって。イルカ先生もそうなんでしょう？」

これまで共に過ごしてきたなかで、ぼんやりとはあるがカシの昔の話を聞く機会があった。父親の死。親友との別れ。上忍師になる前は暗部に所属していたこと、そうして四代目があの災禍で亡くなったことは、木の葉の人間なら誰でも当然知っている。

傷ついているのだ、カカシは。それぐらい分かっていたつもりでそうでなかった自分自身に、イルカはさあつと青ざめた。イルカとて九尾の事件で、両親を失っている。けれどカカシは父親を自死で、親友も、師をも亡くし、暗部では数多の敵を殺め、今もなお、高ランクの難しい任務ばかり割り当てられて、命を懸けて戦っている。そんな彼に、なんてことを。

イルカは己の浅はかさに、心臓が潰れるような思いがした。浮かれていたのだ。里の誉れと呼び声高い彼に懐かれている気がして、自分の価値まで上がったみたいに感じてしまつて。

「——ごめんなさい！ ごめんなさい、カカシさん。俺なんてひどいことを。勝手に決めつけて、無神経に……！」

「あーいや！ いやいやいや！ だいたいみんなそう思うらしいですよ、オレが珍しい例だっただけなんで！ わあイルカ

先生、そんな顔しないでください！ オレが泣かせちゃったっぽくなるじゃない」

「でも……！」

教師だというのに、情けない。自責の念で顔を歪めるイルカの肩を撫で、向かいに座るカカシが宥めていた。叱られると分かっている子供のような表情をしているイルカへ、カカシは苦笑を浮かべてみせる。

「ほんとにいいんですよ、気にしてないから。じゃあこうしましよ、今度イルカ先生の恋バナ聞かせてもらえませんか？ オレ聞いただけしかできないんでそういうの縁遠かつたんですけれど、実はちよつと懂れてたんですよね」

「……カカシさん……！」

なんて、なんて優しいひとなんだろうか。いたずらに傷を抉つたイルカに対してほとんどペナルティにもならない提案を持ってきて、それだけでキャラにしようとしてくれているのだ。イルカはぐつと唇を噛んだ。

もつさりとした外見のせいかたいしてモテもせず、別に惚れっぽいわけでもないのです、お付き合いの経験なんてこの年になつてもたった二人だ。それも、自分から告白をした人には見事

に振られ、相手から言ってきたという理由で付き合ってた二人にも最終的には振られてしまったという、なんとも格好のつかない結末である。

なんとなく気恥ずかしくてその辺りはカカシに話していなかったのだが、今となつてはそんなことどうでもいい。全部話そう、とイルカは思った。

短い期間だったとはいえ、楽しかったこともそれなりにある。僅かかもしれないが彼が聞きたいと言つた恋の話を、恋愛の喜びを、この優しい男に伝えたいと思つた。凄腕の上忍相手に話す内容じゃないかもしれないが、イルカにできることならなんだつてしてあげたかつた。

「……もちろん、いいですよ！ んじゃそうですね、さすがに人に聞かれたら恥ずかしいんで、今度は俺んちで飲みましようよ。休みが合えば、泊まつていつてくださつてもいいんですよ。中忍寮なんで狭いんですけど、それでもよければ！」

「わあ、嬉しいです！ 是非是非お邪魔させてください。オレ手土産にいい酒持つて行きますよ。どれにしようかな、何本か貰い物があるんですよえ」

「うわあーカカシさんが貰うお酒とか、レアなやつがありそうですねえ！ こっちこそ楽しみです、すみませんねなんか逆に！」

いえいえそんな、オレだつてめっちゃくちゃ楽しみにしてるから、と言つてカカシが笑うと、周りの空気がキラキラ輝いて見えるくらいに華があつた。酒気で頬を染め、控えめに微笑むハンサム。これが絵にならないわけがない。相手が男だろうが女だろうが、綺麗なものを見せてもらつて、こちらだつてお礼でもしたい気分だつた。

イルカは眼前の美しい顔立ちにうつとりと見惚れながら、いつか訪れるだろう、楽しい夜へと思いを馳せていた。

その日は意外と早くやつて来た。スケジュールの分かりやすいイルカに合わせ、カカシが都合をつけてくれたのだという。特別扱いを受けているみたいで、なんだかくすぐつたい気持ちになつた。

そんなわけで本日は、イルカの家で酒宴を行うことになつている。物が多く狭苦しい和室、その真ん中に置かれたちやぶ台の上に、ひと瓶ウン千両するとかなんとか聞いたことがあるどころの銘酒が複数本置かれていた。

夕食自体はイルカが作ったダイナミックな切り方の野菜炒めと市販のつまみがいくつか、というかなり見劣りする内容なのだが、この際それは気にしないことにした。きっとカカシさんはそんなつまらないこと問題にしないだろう、とイルカには思えていたからだ。

「じゃ、カンパニー！」

「はい、乾杯」

グラスを煽れば、良い香りのアルコールが喉を撫でては下りていく。思わず、うまいですねー！とイルカが声を上げると、野菜炒めも美味しいですよとカカシがにこにこ笑っていて、叫びだしたいくらい嬉しかった。彼になにかしてあげられている、それが単純に、物凄く喜ばしく感じられていた。

浮かれすぎてまた妙なことを言わないように、と気持ちを引き締めようとはするものの、美味しい酒、腹を満たす食事と気の合う友人までもが揃ったならやはり調子づいてしまう。

アカデミーで起きたちよっとした出来事、受付所で見かけた珍しい場面、同僚から聞いた馬鹿馬鹿しい噂のことなどとりとめもなく話しているうちにどんどん時間が過ぎ、気付けばすっかり食事も終わって、会話の合間にちびちび酒を舐める頃合いになっていた。

「ああ、ねえ、ところでイルカ先生」

「ハイ？」

「あの、そろそろ聞いちゃってもいいですか。その、例の」

「……あ、恋バナ！」

そうそう、と弧を描いた彼の瞳に照れくさくなって、無意識にイルカは頭を掻いた。またやつちやっただ、はしやぎすぎた。

今日の本題はそれだったことを今さらながらに思い出し、子供たちがするみたいに、ペろ、と小さく舌を出す。幼い仕草にカカシは驚いた顔をして、それからなんともいえない色つぼさで息を吐き、ゆっくりと目を眇めた。

「もー、ごめんなさい。楽しくってつい。やだなあカカシさん、それ早く言ってくださいよ。ずいぶん待たせちゃったじゃないですか」

「いやあ。オレも楽しくってつい、ね。イルカ先生の話聞くの、好きなんですよ」

「なはは……」

小っ恥ずかしさに、今度は鼻を横切る傷痕を搔く。すげー人たらしだなこのひと、もったいない！という心の声は意図して喉の奥に押し込めた。振られてばかりの情けない恋バナではあるが、ひとときの楽しみにしてもらえらるならなにより。そう思っ、イルカは少し遠くを見ながら話し始めた。

「そんなに数がなくて申し訳ないんですけど。二人、ですねえ、俺がお付き合いさせてもらったの。一人目はアカデミーの、

教員としての後輩で、二人目は一時ハマってた飯屋の――」

付き合っていたのは数年前で、おまけに期間も短かっただけに、なんとなく甘酸っぱい心地で思い出が蘇る。初めての彼女に舞い上がったり緊張したりと、忙しくも充実した日々。びったり寄り添ってテレビを見ながら、語り合った夢のこと。

けれど、子供たちへの関わりに没頭するあまりだんだん距離が開いてしまい、同じ失敗はしないぞと意気込んでいた二人目の彼女にだって、結局そこまで時間を割いてやれなくて。

「私、イルカの一番にはしてもらえないんだね」と言われて即答できなかったときの顛末を面白おかしい調子で話すと、同僚たちには爆笑されてしまったものだ。イルカの普段の様子を知っているだけに、さもありませんと思われてしまったのだろう。当のカカシも「そうなんですか？」なんて、困り顔で笑っている。そんな表情さえもいい男だなあと、頭の片隅でイルカは思った。

「じゃあ、今はどうなんですか？ 気になる人とか、そういうのは？」

「野暮ですよカカシさん。さすがに二度もやらかしちやうって、もうかなり懲りましたって！ あの頃から、俺その辺に關しては全然成長できてない気がするんですよ。だから、いいかなって。別に誰からも、相手になんてされてませんし」

「またまたあ」

「いやほんとですって！ そうかカカシさんご存じないんですね、どんだけアカデミー教師がモテないのかを！ あのね、教職は薄給だつてね、直接言わんでもとくにみーんなにバレちまつてるんです！ そういう大事な話は、あつという間に知れ渡ってしまうんです！ んで、それでもいいなんていう女性がいるかいけないか、そのうえで俺を想ってくれるって確率がいかに、いかに低いか……！」

「でもお付き合いしたことあるんでしょー？」

「だからそれはー！」

酔っているせいで、どうにも熱が入ってしまった。そんなイルカを見て、カカシがぐすくす笑っている。会話のテンポが心地良くて、ちよつと楽しくなつてしまつて、またしても遠慮がどこかに飛んで行つてしまつていた。

「カカシさんだつて。上忍のくノ一なんて、綺麗どころばっかりじゃないですか！ 大名の護衛やなんかで育ちのいいお嬢さんにお会いすることも多々おありでしょうし。好みのタイプとか、ないんですか？ ほんとになんとも思わないんです？」

「んー、そうですね……」

ひどく不躰なことを聞いているのだが、カカシがそういう顔をしないので酔っ払いは気付けない。興味津々なのを隠しめせず、イルカはゆらゆらと左右に揺れている。

「……タイプかあ。タイプって言ったなら、そうですね。なんかああいういかにも美人です！っていうのよか、ほら、もつと。素朴で、あつたかい感じの。……純粹そうな、優しそうな……。」

一緒にいると安心できるような、そういうひとが、いいなって」「めちやくちやあるんじゃないですかタイプ！ さては意中の人がいるんですね!? 受付で鍛えた俺の目はごまかせないですよカカシさん！」

「あーいや、ハハハハ。いいじゃないですかオレの話は〜」

「だめだめだめだめ、だーめですって！ こつちにあんなカッコ悪い話をさせておいて自分はだんまりだなんてあんまりです！ さあ吐いて！ 吐きなさい！ ほらあいるんでしょ、好きな人!!」

「もーイルカせんせーこわあーい〜」

完全に、絡み酒のノリである。階級差がある以上、普段のイルカならこんな風には接しない。ただ自室という自分のテリトリーで、相手も気心の知れたカカシで、だからこそその振る舞いだった。

それに、せっかく色々話せるようになったのに、そんな大事なことを教えてくれないとはいったいどういう見なのか。それがイルカは悔しくて、少しだけスネでもいた。確かに自分では役に立たないかもしれないがそれにしたって秘密にしなくてもいいじゃないかと、やたら前のめりになってしまう。

「ん……。あー負け負け。オレの負けです。仰る通り。いますよ、好きな人。でも誰かっつのは勘弁してくださいね、恥ずかしいんだもの」

「ちえー、カカシさんのけちんぼ！ まあいいです、じゃあお付き合いですることになったら、必ず教えてくださいね？ だつたらすぐに分かるでしょ」

「なーに言ってるんですか。お付き合ってもらえるかどうかなんて、それこそずつと無理かもですよ」

「馬鹿おっしゃい！」

聞き捨てならない、とイルカは憤慨した。こんなにカッコ良く、おまけに高給取りで、心根も優しいカカシを振る人間がいるとはとても思えなかった。

加えてなにが腹立たしいかって、本人がそうは思っていないらしいことがとにかく一番気に食わない。俺の気に入りのあんたのことを否定するやつはたとえあんた自身でも許さない！と、妙な正義感が湧いた。

「いいですか、カカシさん！ あなた間違いないイケメンです、忍としてももちろん強くて、それでいて優しく、ほんとのほんとに最高の男性です！ どうか自信を持ってください！ 不肖このうみのイルカ、太鼓判を押させて頂きます！ あなたに好かれたその人は、きつと幸せになれますよ。だってあなた

に愛してもらえないんですよ！ その人が羨ましいですよ俺は、あなたみたいな素敵な方に想いを寄せてもらってるんだから。そんなの光栄に決まってるでしょう！ だから、ね？ 弱気になつてちゃもつたいたないです。男なら、当たつて砕ける！ですよ！」

あつ、最後のやつはフラれて来いつて意味に聞こえちゃうかな？と一瞬不安に思つたが、そういう風には受け取られていないようだった。

カカシは目を見開いて、よつぽどびっくりしたのかぼかんと口を半開きにしている。それから「イルカ先生……っ！」と身悶えながら顔を両手で覆つたので、イルカは無事己の演説が響いたようだと言頂天になつた。そうです、あなたはとつてもいいひとだから。だから早く幸せになりなさい、と、嘘偽りなく思つていた。

カカシはふるふる震えながら、満足げにひとり頷いているイルカをそつと見上げる。

「——実は、オレ、自信がなくて……」

「またそんな、どうしたつていうんですかカカシさん。どんな強敵にだつて怯まないあなたがそも怖がることなんて——」

「経験が、その。あの、なくて。だからですね、あの……」

しどろもどろで話すカカシの姿に、ようやくイルカは合点が

いった。なるほど、彼はイルカの四つ上だが、その年で女性経験がゼロなのだ。傍目にはともかく本人にとつて、それは大きな心理的ハードルになるのかもしれない。

「~~~~~ん——、あ——、え——とその……。そうなんです、ね、いや実は俺もそういうのあんまり自信ないんですけど……。でも、そんなもんですよ！ ぶっちゃ俺なんか全然下手つびなんですよ、女性つて意外と怒らないでいてくれますから！ カカシさんなら数こなせばすぐに要領覚えられますつて。ほら、いつつもエッチな本読んでるじゃないですか！」

「いやそのそれはそうなんですけど！ あれは物語なので、断られるとかないじゃないですか、嫌われちゃうとかないじゃないですか！ そりやイメトレだけはばっちりなんですけど、たとえば……、たとえばイルカ先生だつたらつ、どんな風に誘われたらその気になりますか!?」

「お、俺ですか!？」

「そうです！ イルカ先生です!!」

なんで俺？と疑問には感じたが、しよせん酔つ払いの思考回路なのでまともに働くわけもない。ああきつとカカシさん気が動転してるんだなあ上忍なのに可愛らしいところもあるんだなあカツコいいも可愛いも兼ね備えてるなんてさすがだよなあなどという加減な感想の波にざつぱざつぱと飲み込まれ、常識と良識が深いところへと沈んでいく。

そして胸に残ったのは、答えられる質問には答えるべきだろう、というおよそ見当違いな生真面目さだった。記憶のページをばらばらとめくって、きゅんとしたシチュエーションをすぐさま頭に思い浮かべる。

「うん、俺はですね！　ちよつと離れてたのが急に寄って来て、あと手をですね、そろーつと握ってくれたりなんかして。で、ちよつと照れながらキスしてくれたりなんかしたらもうねえ、お恥ずかしい話なんですがそんだけで即あれがギンギンギンのギンに……」

「分かりました!!!」

なにが分かっただんどうか、イルカにはそれが分からなかった。分からないうちに、ちやぶ台の向こうに座っていたカカシが立ち上がり、こちらにずんずんと歩み寄って来るのが見えた。それからクナイだこのある指先がイルカの手にそうつと触れ、指と指との間を艶っぽくなぞって、そうして。

「失礼します!!!」

切羽詰まったその声が耳に届くのと同時に、畳へと押し倒される。あ、とか、え？とか、言おうとしたのだろう、微妙に開いた唇のなかに、ぬるりと舌が突っ込まれていた。

(舌?)

カカシの唇とイルカの唇がくつついて、ぬるぬるぬめる舌がなんらかの意図を持ってイルカの舌に絡んでくる。裏側をなぞり、ちゆう、と音を立てて先端を吸われた瞬間に、唐突に現実を理解させられた。

「えっ!?　あ!?　えつ、なんでこれ……キス!?　ちよつと待って、待……っ!」

「オレ!」

とにかく逃げようと暴れだす前に、あっさり両手首を押さえ込まれる。当たり前だ。上忍でもトップクラスの人間と、内勤ばかりの中忍とじゃ反応速度があらさまに違う。

押し倒され、下からの角度で見上げたカカシはまるで別人のように見えた。顔が真っ赤になっていて、どうも酒のせいだけではないように思える。眉を寄せ、苦しそうで切なそうな表情をしているけれど、その右目にははつきりと、欲情の色が見てとれた。

「オレ、イルカ先生が好きなんです。オレの好きな人、イルカ先生なんです!　どうやって伝えたらいいのか全然分かんない」

かったんですけど、っこ、これで合ってますか？ 少しはその気になれたんでしょうか……!?!」

「……へっ!?!」

誰が誰を好きだったって？ その気づてなだが、と数度まばたきを繰り返して、ようやく彼がイルカのリクエスト通りに動いていたのだと思に至った。

そばへ寄って来て、手を握って、それからキスを。いやしかし押し倒してくれなんて言った覚えはないのだが。そういうえばキスって、カカシさんと俺キスしちゃったのか。男同士だぞ、そんなバカな。ああそれにしたって、ばくばくばくばく心臓がうるさい！

「……ちよっ、待……っ！ と、とりあえず離してください！ あんまり急すぎて俺、俺、どうしたらいいか……!!」

「~~~~っダ、ダメです！」

「ひえ！」

うろたえて思わず見やった、その先にびつくりしてしまった。彼が、両眼を開いている。赤と黒のきついコントラストと向き合えば、それが普段瞼の下に隠されたままの左目、つまりは写輪眼であると突きつけられた気分になった。

「手荒なこととしてごめんなさい、でも、でも……!! あ、の、もう少しだけ、時間をください。絶対気持ち良くしてあげるので、

あの、それから、オレのこと好きになれるかどうか考えてみてもらえませんか!?!」

「はい……!?! つうわ、わ！」

くる、くる、くる、とカカシの瞳の模様が回って、幻術をかけられていると分かったのだがだからといってなにもできない。幻術返しの印を組もうにも両手は捕まってしまっているし、そうでなくたってこの近距離で写輪眼なんて使われたら、ひとたまりもないんじゃないだろうか。

そんなことを考えているうちにも、地面から包帯のようなものが生えてきて、手足を拘束してくるのが見えた。幻だと認識していたところで、やっぱり抗えるものでもないらしい。半身を起こしたカカシが、「ごめんねイルカ先生」と申し訳なさそうに小さく呟いている。

「すぐ悦くなるから……!!」

「ツン！」

こめかみに、頬に、それから唇に、ちゅっちゅとキスをされる。いやらしい感じで片耳に触れられて驚いた拍子に、またぬるんと唾内へ舌を突っ込まれた。自分からするならまだしも、慣れない感触に身体が強張る。

唇を吸われて、あちこち舌を舐められて、呼吸のためにワン

テンポ間を置いてから、再び深く口付けられて――。

(あれ)

ちゅう、ちゅう、くちゅ、ちゅぷ、と、淫らな音が間断なく鼓膜を揺らし、もともとの酔いと酸素不足とで頭の芯がぼうつとする。というか、腹の奥が熱くて、これはなにかの間違いでなければ、ひよつとして。

(勃……っ!?)

己の状態を自覚したなら、いよいよイルカの雄が硬さを増した。もう認めるしかないのだが、このひとすげーキスがうまい。唇が涎でべろべろなんだけど、そんなことにすら興奮するくらいにまで感度を高められてしまっている。なんだこの童貞。イメトレだけでここまでやるのか上忍は。いや、だからこそその上忍なのか。

「あ、よかったあイルカ先生……!!　ここ、気持ち良さそうになつてるじゃないですか……!」

「っ、んうう!」

服の上からではあるが勃起した陰茎を撫でられ、よく知った快感がぞくぞくと背筋を走る。カカシは身を起こし、小さく悶

えるイルカを嬉しげに見下ろしていた。

「嬉しいな、そんなに悦かったですか?　ふふ、すっかり大きくなっちゃって。可愛いなあ、イルカ先生のここ……!」

「う、う、やめ、やめ……っ!」

「ね。オレも、ちよつとだけ……!」

「ふえ、あああああっ!?!」

イルカの声が驚きにひっくり返る。それもそのはずで、カカシは自らの股間を、イルカの股間にびったり押し当てて互いに膨らんだ二本の屹立が、ぎゅうつと押されて服越しにくつつく。

(カ、カシさんが、勃つて……!?!　なにに!?!　俺に!?!　まさか!　おかしいだろそんな、おかしい……っ!)

「ひ、あ、あ、あつ!　♡」

「んっ、ん……!　♡」

そのまま腰を揺るので、昂つたペニスがごりごりごとぶつかった。非日常も非日常すぎて、まったく頭がついてこない。唇からどちらのものとも分らないような涎を垂らし、イルカは甲高く声を上げていた。

「ああ、きもち……!　♡　嬉しいです、イルカ先生が感じてくれて……!　♡　ずつと夢だったんですよ、あなたとこういうことするの……っ!　♡　硬いですねえ　♡　オレももうがちがちです、すごい、すごい気持ちいい　♡　イルカ先生、イルカ先

生……っ！♡」

「ひうう、う……っ！♡」

ず♡、ず♡、ずり♡、ずり♡と、畳との間で起こる衣擦れの音がひっきりなしに聞こえてくる。自分の乱れた呼吸音もひどく耳障りだったが、なによりカカシの爆弾発言が一番衝撃的だった。

ずっとうういうことしたかったって、どういう意味ですか。あなた俺のことをいっただいという目で、と、疑問ばかりが浮かぶのに、久方ぶりの快感に翻弄されている下腹がどうにも熱い。

強く押し当てられているせいでカカシの性器の張り具合まで分かってしまつて、なんだか、すごい。いやらしい気分になつてしまう。

「~~~~~~~~っで、出る……♡ 出ちゃいますっ、カカシ

さん……っ！♡」

「え……♡ ……あ、はい！♡ すみませんオレ、気持ち良くてついで……。あの、下、脱ぎますか。その、汚しちゃうかと、思うので。服……、ズボンと、下着と。いいですか、脱がせちゃつても」

「うええええ……っ！♡」

信じられないことだが、射精に備えて下半身を露出させてもいいだろうかと聞かれている。聞くな。聞かないでくれ。幻術

で手足が動かないのは実際そうだし、服を精液で汚すなんて子供じみた真似は本意ではないけれど。だからといってこの状況を招いた張本人にそんなこと聞かれるのは、こういつちやなんだが残酷すぎる。

「イルカ先生……」

「う、う……♡」

そんな目で見ないで欲しい。もう写輪眼は閉じていて、カカシ本人の瞳はじっとイルカの顔を見つめている。おあずけをさされている犬みたいだ。すぐそこにあるうまそうな餌を食べたくてしようがないのに、よし、の合図を待っている目だ。

あんまり待たせても可哀相だからいいよと言つてあげたいのだが、この場合の餌はイルカの身体なのだ。イルカはカカシのねちっこい視線に曝されながら、ぐるぐるぐると逡巡する。

「……っ！♡」

とうとう、返事はできなかつた。だから、小さく頷いた。まるで承諾してしまうようなそれを見逃して欲しい気持ちがかかりあつたが、現実はそう甘くない。カカシはカッと片目を見開き、イルカのボトムを下着（と）といっぺんに抜き去つた。ぼろん、と飛び出たイルカの男性器へ、血走つた眼差しが遠慮なしに向けられる。

「……あ、あんま、見な……!♡」

「~~~~~と、すみません……!♡ あの、オレも、脱ぎますから。これでおあいこですから、イルカ先生にだけ恥ずかしい思いをさせたいわけじゃないですから……!」

「いつ?!♡」

慌ただしくカカシが服を脱ぐ。同性同士であるがゆえにそれ自体はどうということでもなかったのだが、なにがいけないってその中身だ。全身裸になったカカシの下半身、銀色の茂みのその下に、異様な大きさのソレがビキビキと血管を浮き立たせ、雄々しく勃ち上がっている。

珍獣を見たかのような顔でイルカがそこに釘付けになっているので、カカシはもじもじと唇をもじつかせた。

「……アハハ。なるほど、こりゃ結構恥ずかしいですね、ほん」とに

「……すつ、すみません!♡」

「いえ! いいんです、もつと見て。オレのこと、もつと見ててください。あなたのことが好きで、だからこんなになっちゃってるんです。これで、信じてもらえますか?」

「~~~~~あう、いや、その……♡」

吹っ切れたようなことを言っておいて、カカシの頬はこれまで見たことがないくらいに赤い。イルカだって、顔面のほてりが尋常じゃなかった。

大の男がふたりして、半裸と全裸で恥じらいながら、いったいなにをしてるんだろう。イルカと同じことをカカシも思っていたようで、意を決した風にぎゅつと眉に力を込めると腰を浮かせ、二本の屹立をびたりと重ね合わせた。服越しでない、肉と肉とが触れ合う感触が生々しい。

「つあ!♡」

「一緒に気持ち良く、なりましようね……」

カカシが腰を揺する。大きさも太さも違う。ニスが擦れ、次第に水音を立てていく。俗に兜合わせというやつで、もともとほぼ限界まで高められていた性感は、あっさり勢いづいてしまっていた。ふ♡、ふ♡、と弾む呼吸音がどちらのものなのか、今となつてははつきりしない。

「……っカ、カカシさん……っ!♡ カカシさん……っ!♡」

「はい、なんでしよう。気持ち良さそうでなによりです、オレも、つは、すごくいイ……っ!♡」

「~~~~~……っ!♡」

ただでさえ色気のあるカカシの声が、吐息に混じって壮絶に艶めかしい。ふたりの性器から溢れた先走りがにちゃにちゃと濡れた響きを奏で、その合間を荒く乱れた息の音が埋めていく。

住み慣れた狭い和室は、性的な刺激で満ち満ちていた。部屋湿度まで上がったかのように感じられて、のぼせたみたいに頭がぼうつとする。

「つうあ、だめ、イク、イクうう……っ！♡」

「イ、ルカ先生……っ！♡ いいよ、イって、イって……っ！♡」

「あ、も、やだ、やだ、やだああああああ……っ！♡」

促されたのが決定打になって、とうとうイルカは遂情した。

性欲の処理なんてろくにしないような日々が続いていただけあって、溜まりに溜まっていた濃い白濁がびゅくくっ！♡と、勢いよく腹の上に飛び散っていく。

「つく……！♡」

それをじっと見つめながら、カカシもまた射精した。半分萎えたイルカの陰茎にぐりぐりとペニスを擦りつけつつ、浅黒い肌をした下腹へと欲望をぶちまける。

「……っはあ、はあ、はあ……っ！♡」

「ふ……っ♡」

吐精の余韻から抜けたのは、カカシの方が先だった。イルカの頬を愛しげに撫で、耳元にくつも口付けを落とす。

「可愛い、すっごく可愛かったです、イルカ先生……♡ほん」と夢みたい、あなたとこんなことできるの！

「ん、な、わけ……っ♡」

「オレは嘘は言いません。ね、ほら……」

「ひえっ!?♡」

押しつけられたカカシのソレは、先ほどイったにも関わらずやや硬度を取り戻しつつあった。なんなんだこの回復力。これ

が上忍の体力か。動揺するばかりのイルカはツッコミを入れることもできずに、間抜けな声を上げるだけだった。

「まだまだたくさん気持ち良くなりましょうね……♡」

「う、ん……っ♡」

再びカカシの顔が近づいてきて、イルカの唇を唇で塞ぐ。一応逃げようとしてはみるのだが、この状況においても幻術がばっちり効いていて身動きがとれない。

さらに、カカシの口付けの技巧によっても、抵抗する意思が徐々に奪われつつあった。唇を食まれ舌全体を擦られ、上からとろんと唾液を注ぎ込まれている。自分でもどうかと思うのだが、極限まで性感を高められていた唞内は、それを甘露であるかのごとく誤認識しているようだった。

だつてなんだかすごく気持ちがいい。他人の、カカシの体液を無理やり飲まされているのに。こんなの知らない、自分の身体がこんな風になるなんて全然知らないけれど、未知の扉をこじ開けられてしまうことに、恐怖だけを感じているのかといわれれば答えは否だった。

なんだか、めちやくちやにドキドキする。きちんと言語化できない興奮に自然と涙が滲んで、潤んでぼやけた視界には、少し悪い表情をしてイルカの胸元に顔を近づけているカカシが映っていた。いつの間にかインナーはたくし上げられて、脇まで肌が見えてしまっている。

が証拠だともいうみたいに、どうしようもなく目に飛び込ん
でくる。

「つは、たまんない……!!♡ ねえイルカ先生、もつと気持ち
良くなることしちゃってもいいですか……!?!♡」

「うえ!?!♡ つちよ、ひえ、ひええええええ……つ!♡」
質問のていでいて、カカシのそれはただの予告だった。返事
も聞かずにうずくまり、彼は、イルカのアナルにそつと舌を這
わせていた。

「ば……つ!♡ ば、ばかつ!♡ カカシさんのばかつ!♡
どこ舐めてんですか汚いでしょつ!♡ びよ、病気になるた
らどうするんですかやめてやめてやめて……つ!♡」

「汚くなんかいいですつて、イルカ先生の大事なところ……つ!
♡ 可愛いし、すごく……つ♡ 美味しいです♡ つはあ、
ヒクヒクしてるう……!!♡」

「ふにいい♡ いあ、あ、やめ、やめえええええ……つ♡」
もがこうとしたところで幻術によって手足の自由は奪われ
たままで、結果的には大人しく寝転がり、軽く股を開いて蛮行
を受け入れている。恐たるもの必須とされているので知識の上
では知っているが、自分自身が同性に尻穴をしやぶられる羽目
になる覚悟はできていなかった。

「つう、いやあ、そこだめつ♡ カカシさあんつ、お尻やめて
……つ!♡」

「やです……つ!♡ ここ、使わせてくれたら……、ね?♡
すつごく悦くしてあげる、すつごく悦くしてあげるから、イル
カ先生のここ、オレにちょうだい?♡ ねえ、いいでしょう?
♡ だつてほら、物欲しそうにお口パクパクしてるもの……
つ!♡ だからお願い、イルカ先生♡ ちょうだい、ねつ、
あなたのここ、もつとオレにちょうだい……つ!♡」

「してなあ、い♡ パクパクなんて、しへにや、ひいひいん
……つ!♡ ああ♡ ふあああ、あつ!♡」

ずにゅん♡とカカシの舌が中まで入ってきて、イルカの背
が反り返る。涎でずるずるになったそこに何度も出入りする肉
の楔は未知の感触で、ここは出すだけじゃなくて受け入れる器
官なんだよ、と言いついて聞かせてきているみたいだった。

他人に、それもあのカカシにそんな真似をされると思え
ば頭の中に火花が散って、イルカはいいやいやと首を振る。怖い
し、嫌だし、やめて欲しいし逃げ出したいのにどうして。どう
して、こんな……。

「つひあ、う!♡ あ、あ、らめ、らめ……くくくくく……つ!
イ、つくうううううううううううううう……つ!♡」

ぎゅつと歯を食いしばったのは、怒涛のような快感をこらえるためだった。不自然に跳ねた腰の下の方で、張り詰めた性器が一気に弾ける。

びゅく!♡びゅくるっ!♡びゅくびゅくっ!♡と精液を射出するさまを、素早く起き上がったカカシが瞬きもせず凝視しているのが気配で分かった。浅ましい姿を曝すのが恥ずかしくて、その羞恥がさらに動悸を速め、なぜだか妙に昂つてしまう。

「はあ、はあ、はあ、はあ……♡」

「嘘でしょせんせ、すっごい才能……!!♡ お尻、初めてなんですよね?♡ 舐められるだけでイけちゃうんだ……!!♡」

「~~~~~」
かあつと頭に血が上る。こんなこと、したくてできたわけじゃないのに、あんたがどうにも上手すぎるから。そもそも女とやったこともないって言ってたくせに、とずつとひっかかっていた矛盾に気付いたなら、いっぺんに怒りに火がついた。

「なんなんですかあんたウソついたのはそっちでしょ!♡いくらなんでもどつ、童貞がこんなむちゃくちゃなこと平気でやれるわけあるかっ!♡ 俺を騙してたんですね!?!♡ 俺はカカシさんを心から信頼してたのにこんなっ、格下を弄んで楽しいですか!?!♡ あなたがそんなひとだなんて思ってもみ

ませんでした……!!♡ 最低だつ、あんた、ほんとに最低……っ!♡」

「……………は……?」

イルカの大声に怯みもせず、カカシは間抜けな顔で一時停止してしまっている。この期に及んでしらを切る気なのかと、身動きもとれないままにイルカはカカシを責め立てた。

「経験がないって言ってたじゃないですか!♡ 経験がなくって自信が持てないって!♡ 自分のついたウソくらい覚えてろよ上忍!♡ それともなにか、俺相手ならそんな調子でもうまくやれると思いましたか……!?!♡」

「えええええええつ?!♡ あ、そういう!? いえあのつ、ご、誤解ですよイルカ先生! オレそんな風に言いましたか!?!」

「なにを白々しく……っ!♡」

この野郎、とひときわ強く睨んでみればカカシがひゅつと青ざめたのが分かる。そして次のカカシの台詞で、今度はイルカの方が青ざめた。

「ごめんなさい! えと、経験がないって言ったのは恋愛とか告白とかの経験のことで……っ! あ、お付き合いしたり、自分から気持ち告げたりしたことがないって言ったつもりだったんです! で、その、えー、童貞っていうのは……。た

ぶんちよつとその、そののところに關してはイルカ先生の勘違いってどうか、いえ勿論オレの言い方が紛らわしかったんだと思うんですけども……！」

えっ。あつ。……確かに。

てつきり言い辛いから曖昧な感じにしたのかと思っていたのだけれど、カカシの話していた内容をよくよく思い返してみれば、そういう意味に聞こえなくもない。

シヨックで一瞬気が遠くなったイルカだったが、その後の衝撃はさらに凄まじいものだった。

「で、ですね……。あの、本当にお付き合いとかそういうのはゼロなんですけども、……ええつと、暗部とか上忍とかつて、明日の保証がない分貞操観念がですね、なんと言いますか……。非常にその、ユルツユルなところがありまして……。あの頃はオレもそういう空気に慣れちゃつて、暇はないけど金はあつたり、恋はないけど言い寄つて来る女はいたりで、その……。童貞っていうか、むしろ逆？ 子供の時分から廓に連れてかれてましたし、房中術が専門のくノ一と組む機会もあつたりとかで、その……。いやまあもうある程度分かつて頂けるとは思うんですが、……。ええと……。……ごめんなさい、閨事はたぶんオレ、結構得意なんだと思います……！」

閨事は得意なんだと思います、の部分が脳内で何度もリフレインする。

童貞は勘違いだった。むしろはたけカカシは、尋常じやないレベルの巨根ヤリチンテクニシャン上忍だということがはっきりしてしまつた。だとすればイルカがここまで翻弄されてしまつたのも頷ける。未だかつて、これはおそらくだが女性を一度もイかせられてもないような未熟な自分が太刀打ちできる相手ではないのだ。

ここまでくると上忍対中忍というよりも、火影対アカデミー生ぐらいに表現した方が実情に近いように感じられた。逃げるが勝ち。つていうか、逃げる以外に生き残る道がない。

「で、誤解も解けたところで続きをしてもいいでしょうか？」

「んなわけあるかアアアアアっ!! っちよ、ヒイ……っ!♡」
あれだけくつちやべつていたにも関わらず、カカシの雄はちつとも萎えていかなかったらしい。ハチャメチャに臨戦態勢の張り詰めた巨根が、イルカの後孔にあてがわれている。

位置関係の問題で直接見えるわけではないのでなんとなくだが、どうもそこが避妊具を装着済みのような気がして、このひとつの間にそんなこと済ませたんだろうかと手際の良さ

い。でつかい犬に懐かれてるみたいだ、なんていう心地にもなったが、実際のところそんなに甘い相手でもなかった。

繋がったまま、カカシがゆさゆさと腰を揺する。挿入時ほどの衝撃はなかったけれども、その代わり、身体を犯されている実感と、未知の感覚がぞわぞわとイルカの頭を侵食し始めていた。抗うすべもなく、だから嬌声が漏れ始める。

「っあ、あー………に………っ♡ あう、あー………♡ に、これ、ひあ………っ！♡ ひあんっ、ああああああああ………っ！♡」

「ここがね、前立腺って言って、男の泣き所らしいですよ♡ あ、いえオレも男抱くのは初めてなんで、プロの女性からの受け売りで申し訳ないんですけど。いやいやしかし、あながち間違ってもいいよう………♡ あはあ、イルカ先生♡ 気持ち良さそ………♡」

「ひい、ひ………♡」
色事は得意だと、自分でのたまうだけのことはある。ゆっさゆっさとイルカの内壁を揺さぶりながら、カカシはすでに弱点の目星をつけてしまっていたようだった。

数回に一度、アナルの浅い部分を意図的に強く突かれている。そうされるとチカッと視界が瞬いて、己が感じているのが快樂なのだと思いつくまでに、イルカはしばらく時間を要した。

「後ろ使っても、全然萎えないんですね………♡ イルカ先

生がすごいえっちな身体してくれて、もうオレこんな嬉しいことないです………♡ えっちなイルカ先生♡ 可愛い♡ 可愛い♡ 好きです、イルカ先生が大好き………♡」

「くくくくそんな風に言わなっ、んんっ！♡ ああ、だめ、おねが………♡ やめ、ひやめてくらはい、俺これだめれすっ、なんかだめ、こういうのムリ、ムリいいいいいいいい………♡」

いやらしい身体だと言われてしまって恥ずかしい。大好きだなんて言われたら、それもまた違う方向で恥ずかしい。恥ずかしくて脳味噌が茹だつて、自分が動揺しているのか興奮しているのかももう分からなくなってくる。イルカは大粒の涙を零し、押し掛かっているカカシの上半身に縋りついていた。

「幻術は、すでに解かれているのだ。腕も足もちゃんと動いているのにイルカはカカシにしがみついて、ひんひんと鳴き声を上げています。」

「ん、こういうの好きなんですか………♡ えっちなあなたが、オレは大好きですよ♡ こんな可愛いひとませんよ♡ ナカもすごく具合がいい、オレのためにあつらえられたみたいですよ………♡ イルカ先生のここがオレのためにあるんだとしたら♡ 夢みたいだなあそんなの！♡ オレにこうされるの待っててくれたんですかねイルカ先生は♡ ああ幸せ、勇氣を出して良かったですホントに………♡」

「ひぐ♡ ああ、あああああ、にを、勝手なことを……!!♡
 つうあ、も、イく、イく、またイっちゃ………んんんっ!?!♡」
 同意もなくひとの身体をいいようにしておいて、調子づくに
 もほどがある。そう非難してやれたらよかったのに、彼の発言
 を完全には否定できなくてつらい。

変なところで生真面目さを発揮してしまって、気持ち良くな
 んてないと嘘も言えなかつたし、なんなら射精しそうだよ、馬
 鹿正直なことをイルカは口に出していた。それを聞いたとたん、
 カカシがびたりと腰を止める。

「つはあ、はあ、カ、カカシさ……!?!♡」

「……あの。ほんとはこのまま突っ走っちゃいたいのはやまや
 まなんですけど、でも、その……」

「……に?♡ わ、かんな、……?♡」

くっついていた身体を離して、カカシがイルカの顔を覗き込
 む。単に房事の最中だという割には、彼は真剣な表情をしてい
 った。

「えっと、ワガママで本当申し訳ないんですけど……。ここか
 ら先を、求めてもらえませんか。ここまででこんなに乱れても
 らえるなら、この先はきつと、もつとすごく気持ち良くしてあ
 げられます。だから、ここから先が欲しいって、あなたの方か
 らオレに言ってもらえないでしょうか……。それまでオレ、動
 きません。だから、だから、イルカ先生。この通りです、お願

いします……!」

「つは、はあああああああああ……っ!?!♡」

大きな声を出すとつられて腹にも力が入ったらしく、ずっぱ
 り埋まった陰茎を絞られて、「うー」とカカシの肩が跳ねる。

けれど、決意の固さを示すかのように彼は下肢を動かさず、
 状況は一步も進まなかつた。信じられない、と目を見開くイル
 カに向かつて、カカシは再び懇願をし始める。

「脅すみたいにしちゃってごめんなさい。でもオレ本気なん
 です、一人相撲にしたくないんです。オレたちすごく相性いいで
 すよ、伝わってますよね? だから、お願い……。イルカ先生、
 オレも辛いです。もつとあなたが欲しい、最後までセックスさ
 せて欲しい。お願いします、イルカ先生……っ!」

「は、か、やる……っ!♡」

本格的にわけが分からなくなってきた。ヤリたがったのはそ
 っちだろうに、どうしてこつちが続きをねだらなくちゃならな
 いんだ。本気だから? 一人相撲にしたくないから? そんな
 理由こそがまるつきり自分勝手すぎる。だってこつちはあなた
 のせいで、こんなにしんどい思いをしてるつてのに。

中途半端に高められて、それで身勝手な事情で快感を取りあ
 げられて、おあずけにさせられて。ひどいじゃないか、と怒り
 が沸点に達せば、黙ってなんでもいられたかった。口を開いてし
 まったならあとは勢いがついてしまつて、腹の奥で渦巻いてい

た本音が、見事にべろべろだ漏れる。

「も、待、待たせてんなよばかあ……っ！♡ このクソつたれ！♡ シて、シて、最後までセックスしてっ、俺のことイかせ……っ！♡ おおおおおおおおおおおお……っ！♡」

「イルカ先生……っ！♡」

言い切るか、言い切らないかのうちにずんっ！♡と強烈な一撃がイルカの胎内を穿つ。感極まったカカシはイルカに抱きつき、滾る情欲をぶつけられたイルカの方はといえばそのまま射精してしまっていた。

カカシの鍛え上げた腹筋へ、生温い体液がびるびると当たっては落ちる。

「ご、め、も、止まない……っ！♡ でもイイんだよね！♡
♡ イってるっことはイイんだもんね！♡ オレちゃん
とできてるよねイルカ先生……っ！♡ 気持ちいいセックス
っ！♡ できてるよねえええ……っ！♡」

「っひ！♡ あ、が、おごっ、ほごおおっ、待って、待……っ！
♡ れ、イったばっ、ひいっ！♡ そこだめえっ！♡ しょ
こだめえっ！♡ おかしくなるっ！♡ おがしぐにや、んん
んんんん……っ！♡」

悲鳴を飲み込むみたいに口付けられてしまっ、もう文句も

言えやしない。ぐっぽんぐっぽん遠慮なく突きたてられる雄は硬く、イルカの弱いところを何度も抉って、追い立てられるように息も体温も上がっていく。

「んおお♡ はげ、し♡ んむううっ、んぐうううううっ！♡ カ、カシ、さ……っ！♡ だめ俺まらイぐっ、いっひや……っ！♡ むぐうううううううううう……っ！♡」

「っは、イルカ……っ！♡」

とどめ、とはかりにはあん！♡と鋭く下腹を打ちつけ、カカシが達した。先ほど果てた直後だというのにイルカはまたしても絶頂へ強制的に連れて行かれ、だらしなく口から舌を零した状態で遂情している。

「はあ、はあ、はあ……っ！♡」

「ん、ふ……っ！♡」

極まった余韻もそこそこに、カカシはのそりと半身を起こした。いつもの調子で軽く頭を掻き、イルカのなかから刀身を抜いていく。

「う……。す、すみません、結局我慢がきかなくて……。でも、イってもらえて……ホッとしました♡ イルカ先生が気持ち良かったんならオレ、とても嬉しいです……♡」

「っあ！♡」

ずるるん♡と一物を引き抜かれ、思わず飛び出た未練がま

しい声に、イルカは一瞬で頬を染める。口元を押さえ、じっとり恥ずかしそうにこちらを睨む様子を見て、カカシの瞳が緩くたわんだ。

「あーすごい、いっぱい出してくれたんだあ……♡」
「んん……っ!♡」

無防備に仰向くイルカの腹の上には、ふたりぶんの、粘度の違う白濁がそれぞれに精液だまりを作っている。カカシはそれに手を伸ばすと、意地の悪い動きでイルカに塗りつけた。そうして、びくびく震えるイルカをよそに、その下半身へと目を向ける。

「そーいやここ、大丈夫でした……?」

「ひ、う……っ♡」

イルカがぐったりして動けないのをいいことに、がばりと股を開かせて小さな窄まりを覗き込む。排泄の役割だけを担っていた場所は、受け入れる用途に使われた結果、ぼてっと赤く腫れてしまっていた。

「あ、良かった切れてないみたい……」

「んんんんう、んん……っ!♡」

確かめるような手つきで、カカシの指がイルカのアナルをねち♡ねち♡と繰り返しほじる。もういいんじゃないのか、とイルカが声をかける前に、カカシはおかしな行動をしだしていた。

「……くくくくはー、たまらない……っ!♡」

「あああっ!♡ な、なに、なに……っ♡」

ぬる、と臀部を滴っていくのは、携帯用の容器から絞り出されたローションだった。この期に及んで、カカシは潤滑剤を足してくれやがったのだ。

「いやあの……♡ ここであなかがオレのこと……、その、受け入れてくれたんだなあと思って……♡ だってこんなちっちゃいの……♡ 頑張り屋さんですよ、イルカ先生の……♡ ほんとに、可愛い……♡ つい触りたくなっちゃう♡ だってほら、こんなにオレの指に吸いついてきてくれますし……♡」

「や、め……っ!♡ いじらな……っ!♡」

粘りけが増した箇所を執拗にいじられて、につちよ♡にちよ♡くちゅ♡ぐちゅちゅ♡とひどい音が室内に満ちる。雰囲気のみずさきに気付いたイルカが身を起こして抵抗しようとするも、やはりカカシの方が何枚もうわてだった。

「この辺でしたっけ、イルカ先生のいいところ……♡」

「ひうんっ!♡」

「可愛い声……♡」

「あ、あ、カカシさ……っ♡」

だめだ、これだめなやつだ。カカシの指はもう明らかに、イルカの性感を煽りにかかっている。華麗に印を組むのだろう業

師の技巧が、なんとも馬鹿げた方向で確実に發揮されていた。ぷちゅ♡ぷちゅ♡ぷちゅん！♡とふしだらな動きで解されてしまった尻穴は、本体の態度よりもずいぶんと、物分かりがよくなつてしまつたように思える。

「それに、気持ち良さそうな顔しちやつて……♡ さつきオレのを銜え込んでたときもそんな顔してたんですかね？♡ くつついてたんで見えなかつたんですけど、もつたいないことしちやつたなあ♡ イルカ先生の可愛い顔、オレもつとっしかり見たいです♡ ……ね、いくとこ見せてくれませんか……？♡」

「……………っ！♡」
この変態、あんな本読んでるからだ！と、叫んでいたのは心の中でだけだった。実際にはビックリしすぎてただ息を呑んで終わつた。

これはヤバい、ヤバい流れだぞとイルカが焦るのにも構わず、淫欲に浸つたカカシの腫は、うつとりとイルカを見つめている。「ねえ、イけるでしょ？♡ またおつきくなつてきましたね、何回もイつたあとだからさすがにきついでしようけど……♡ 潤滑剤足してあげますね、ゆつくりしますから♡ イルカ先生のペースでいいんですからね……♡ 好きに感じてくださいいね、オレいくらでも可愛がつてあげられちゃうんで、遠慮しないでいいですからね♡」

「っひ、ひい、ひいんっ、ひ……っ！♡」

可愛がるだなんて言つておきながら、アナルへの愛撫はまるで容赦がない。柔らかくなつた穴を何本もの指でほじくり、イルカの好きな辺りをぐつと押さえて圧力をかけ、また媚肉を觀察するかのようになるときおり入口を大きく開け拡げる。くつちゅくつちゅぐつちゅぐつちゅ♡と水音は絶え間なく鳴り響き、ますますイルカを追い詰めていく。

「あ、あああああ、や、だああああああ……っ！♡ またいく、またいくうううっ、そんな見てたらやだああああっ！♡ なか、開けちゃ、……♡ ひい、ひいん……っ！♡ もおやらああああああ……っ、こんなのお、やらああああああああああ……っ！♡」

拷問を想定した訓練はそれなりに受けたが、こんな仕打ちには耐えられない。とうとうイルカは泣き喚ぎ、そんなイルカに対して、なぜかカカシはごくりと喉を鳴らしていた。そつと避妊具を陰茎から外しながら、カカシは密やかに問いかける。

「見られるの、イヤなんですか……？♡」
こくこくとイルカが頷く。

「こんなに気持ち良さそうなの？♡」

一瞬はつとしたものの、それでもイルカは頷いた。しとどに濡れた短めの睫毛から、涙の雫が一粒落ちる。

「じゃあ、じゃあ、じつと見るのは今回お預けにしますから、

もう少しで絶頂だったのに。上下に何度も振らされていた哀れな陰茎は、突然伸ばされたカカシの手によってきっちりと堰き止められていた。

片足は持ち上げられたまま、不格好な姿勢で呻くイルカを見下ろして、カカシはべろりと、無意識に舌なめずりをする。

「ほんとやーらし、あなたのここ……っ！♡」

「んっ！♡ うんんん……っ！♡」

ゆらあ、と腰を使われて、カカシに握られている。ニスが無様に脈打った。

「女のおそこみたいですよ、イルカ先生のアナル……っ！♡」

「そんな……っ、んああああっ♡」

否定しようとするこすら許されず、言葉通り、女性器のりとく尻穴を穿たれる。

「ふふ♡ ほんとほここ、メス穴なんですよ♡」

「な……、っ！♡」

かっとして思わず見上げたカカシの表情に、イルカはぎくり、と身体を硬くした。こんな彼は、見たことがない。殺気立っているというか、鬼気迫っているというか、獐猛な獣のような、こんな気配を漂わせるなんて。

怯えるイルカへ、カカシは冷たくも高揚した、射るような視線をまっすぐに向けた。

「あのね。受付の皆さんもそりや大したものでしょうけども、

上忍の観察眼もね、舐めないで欲しいんですよ。あなたがどういうときに悦さそうな反応して、どういうことを言われたときにここをヒクつかせてたか……。ちゃあんとね、オレ全部見て、きっちり記憶してるんですよ。要するに、戦闘と一緒になんですよ。一見無駄に思える一挙手一投足だってね、相手のリアクションを確かめていたりするわけで……。で、それからするとねえ、見られるのが嫌だなんて、どの口が言うのかなあ？ ほんとほここ、意地悪されるの好きなくせに……。っ！♡」

「うあ、あ……っ！♡」

ああ、またこれだ。ゆつくりとカカシの紅い目が開いて、イルカに瞳術をかけてくる。荒縄でぎゅつと、勃起した性器を締められるのが分かった。うまくいったと認識すると、カカシはイルカのそこから手を離す。

幻と分かっただけでもどうにかなるものでもなく、イルカはベニスを戒められていると思ひ込まれたまま、直接吹き込まれるカカシの声に鼓膜を幾度も犯されていた。

「ねえ、気持ちいいんですよ♡ ちんこだけじゃなくて、この穴が気持ちいいんですよ♡ イルカ先生初めてだって言ってたのねえ、こんなにあっさりイキまくってくれるだなんて……。♡ ほんとすけべな身体なんだから♡ ねえ、すけべなあなたの大事なここ♡ なんて言うの、知ってるでしょ？♡ あなただっただけの男なんだから、女のおそこをなんて言うか、

知らないわけがないですよね？♡　メスみたいにいやらしい
ああなたのこの名前、知らないわけじゃないですよね!?♡
じゃあ答えてよ、ほら言ってみなよ、ねえ、ねえ……っ！♡

「ひいっ！♡　ひぎいい、い……っ！♡」

押し掛かれ、恐ろしいまでのスピードで胎内を穿たれる。
身体を二つ折りにされ骨盤を立てられてしまい、肉穴を垂直に、
ぐっぽん！♡ぐっぽん！♡と執拗に貫かれている。いかがわ
しい本で出てくるような、これはそう、種付けプレスとか呼ば
れるやつだ。俺あんなひどい格好してんのかと、切れ切れの意
識のなかでイルカは思う。

「ねえ！♡　どこが気持ちいいのって……聞いてるでしょ
っ！♡」

「ひああああああああああっ！♡」
すばあんっ！♡と小気味よい音を立てて引っぱたかれたの
は片側の尻たぶだ。子供にするみたいに、お仕置きをされるみ
たいに、大人の男の手で尻肉をぶたれている。

「ん、こういうのも好きなんだ♡　見られるのも好きだし、意
地悪言われるのも好きだし、お尻ぶたれちやうのも感じるんだ
あ……？♡　もーほんと、こ、の、変態……っ！♡」

「いああああああああっ！♡　や、だ、やあああああ
あっ！♡　ああああああっ、あんっ！♡　あああんっ！♡」
ばあんっ！♡ばあんっ！♡と打音が響き、臀部の皮膚が熱

を持つ。こんなのが好きなわけあるか、と、イルカは身悶え、
口から涎を垂らしながら泣き叫んだ。変に甲高い悲鳴が、自分
でもまるで女の喘ぎ声みたいに聞こえる。

「ほらああっ！♡　どこが！♡　気持ちいいのかって聞いて
るでしょおっ!?♡　答えなさいって……ばっ！♡」

「んびいいいいいいいい……っ！♡」

ひりひり痛む尻が、また、あのカカシに折檻されているなん
てシチュエーション自体が、奇妙な快楽を連れてくる。格上の
忍の命令が混乱した思考回路に染み込んできて、応じなくては
という気にさせられてしまう。わなわなと唇を震わせて、イル
カは小さな、それこそ吐息と間違うような声量で言った。

「……っあ、~~~~~お、まんこ……っ♡　おまんこっ、
気持ちいいです……っ！♡」

「ん！♡　おおー、正解言えたじゃない！♡　偉い偉い♡
イルカ先生、おーりこーうさーん♡」

「あ……♡」

突然優しい声色で褒められて、ふにやりとイルカの頬が緩む。
カカシの律動も尻を叩く手も止まっており、これで許してもら
えるのかと、そう期待した瞬間に。あっさりそれは裏切られた。

「とつてもえっちなイルカ先生はーあ♡　オレのちんこ銜え
込んでるう、お・ま・ん・こ♡　があ、とつても気持ちいい

少し楽にしてやれば、ようやく出口を得ることができたイルカの精液がびゆくびゆく射ち上がっていくのが見えた。艷事の手管で陥落させてしまえと思いついたのはこちらだけれど、それにしたって。苛められて、淫らな言葉で責められてここまで乱れるなんて、このひとつてば本当に。

天性の淫魔を見つけたような気分になって、カカシの口元に危険な笑みが浮かぶ。魅入られてしまったのは果たしてどちらなのかと、答えのない疑問が表に出ることはない。

「つとにこのつ、ドすけば教師め……っ!♡」

「んひいいいいいいいいいっ!♡」

温い胎内に収まったまま、カカシはイルカの、吐精直後のペニスへと手を伸ばしていた。くったりしおれてしまったそれを、乱暴な動きでしごき上げる。

「ひあああああつ、やらあああああああつ!♡ カ、カシひや、俺イつたばつかあああああ……っ!♡ ちんこつ、ちんこもげるっ!♡ 触つちや、触つちややだ……っ!♡」

「まーまーそう言わず……♡ 激エロボディのあんたのことですから♡ これもすぐに覚えちゃうんじゃないんですかあー……っ!♡」

「にや、にがっ♡ ひい、ひいっ、ちんこ変つ、変ですからあああああつ!♡ おっおっおっ♡ おっおっおっおっおっおっおっおっおっおっ……っ!♡」

くちゅこ♡くちゅこ♡くちゅこ♡くちゅこ♡と水っぽい音を立て、イルカの男性器が急速に張り詰める。カカシの目的をはかりかねたイルカだったが、返事をもらうよりも早く自身の変化に気付かされてしまった。

「おっおっおっおっ!♡ おおんっ、おっおっおっおっ!♡ 変、な……っ♡ 変な感じしゅうううっ、カカシさあん……っ!♡ お、か、おかしっ、俺っ、ちんこおかしっ!♡ ちんこつ、ちんこがあああつ♡ すごい来るっ!♡ しゅごいの来ひやうっ♡ 変、変だよ!!♡ こわい、こわ……っ♡ あああああああ、あああああああああああああああ……っ!♡」

叫ぶと同時に、イルカは高々と透明な体液を噴射していた。排尿と射精とを足して二で割ったような感覚ではあつたけれどもあいにく、快感の量は二乗ぐらいに思えなくもない。子供じみた己の悲鳴に恥じ入る余裕すら、もう残されていないかった。……つたあ出た出たっ!♡ あなた潮噴いてますよイルカ先生っ♡ イルカなのにね♡ クジラでもないのにねっ♡ あー出る出る出るっ、連続で出るっ♡ 可愛いっ♡ エロいっ♡ 潮吹き淫乱教師とかエツロエロですよイルカせんせええええええ……っ!♡」

「ひいいいいいっ!♡ ひいっ!♡ ひやめ……っ!♡ あああつ!♡ 出るっ!♡ 出てゆうっ!♡ しよんな……」

「初えつちでそんなとこまで見せてもらえるとか……感激です!♡ あっ大丈夫ですよ、オレそんなに引いたりしませんから!♡ むしろレアな姿を見せてもらえてもうめっちゃくちゃ興奮しちゃう、みたいなく?♡ とにかくオレは準備万端なんで!♡ さ、どうぞ!♡」

「そんな……っ!♡」

さあどうぞとか、まるで宴会芸でも披露するノリだ。そんなわけがあるか、排泄は人として秘匿すべき行為の最上位に当たる。とんでもないと首を振ったところで、カカシはまったく意に介さない。それどころか。

「遠慮しないでいいんですよ」

「ヒ……っ!♡」

きろ、と、目玉だけを動かし、戦場さながらの殺気を当ててきたのだ。上忍レベルのそんなもの、不意に内勤の忍がくらってまともに耐えられるわけもない。

「あ、……ああああああああああ……っ!♡」

よってイルカは、かたかた震えながら失禁してしまったのだ。生身の脚に、じわあ……♡と不快な温もりが広がる。独特の異臭はつんと鋭く、イルカの鼻はまだしも、カカシの嗅覚ではもつと強く感じられていることだろう。

「ふふ……♡ かーわい♡ オレの目の前で、おしっこ漏れちゃいましたねえ……♡」

「う、あ、あ、あ、あ、あ……っ!♡」

わざとらしくくんくん鼻を鳴らされれば、情けなさに視界が滲む。そうして涙目になったイルカの眼前にずいと差し出されたのは、猛々しく膨張したカカシの陰茎だった。立派ななりをして反り返った一物は、興奮の証を見せつけるかのように、脈打つ血管を浮き立たせている。

「うう……っ!♡」

「あはは♡ これね、あなた見て勃起したんですよ♡ 上忍の殺気にあてられて、我慢できずにしーしーしちゃった可愛いとこ……♡ 優秀な教師であるあなたがね、怖いよ♡ っつてビビっちゃって、じよぼろろろろ……♡ っつて黄色いの……♡ ほっかほっかの、しっこ♡ ちっこ♡ ちーちー垂らすとこすぐそばで見ててねえ、そんでバッキバキになっちゃったの……♡」

「……っカカシ、さん……っ!♡」

は♡、は♡、と呼吸の弾む音がある。カカシが高揚しているだけならまだ分かったのだが、自身の息も乱れていることに、イルカは激しく動揺した。こんなひどい言葉遣いで、いやらしい目で見下ろされて。いったいなにが、官能に繋がってしまったというのか。

「要するにコレ、あなたの責任だよな？♡ あーんなえっちな姿見せられちゃ、ちんこも勃つてものですよ♡ だから……抜いてくれますか♡ 手でもいいですから、ほら早く♡」

「うんっ！♡ ……っ、！♡ ん、んううっ♡」

カカシが指で反動をつけ、張り詰めた肉茎でイルカを叩いた。それでも固まってしまっている標的の頬へ額へ、べしん！♡ べしん！♡と追撃が続く。

「カ、カシ、さあん……っ♡」

「ほんつとにすけべなメス犬ちゃんだね♡ なあにその顔♡ すっかり悦んじやつてさあ……♡」

イルカを上から眺めながら、うつとりとしたカカシがそう評する。そんな顔、と言われても確かめようがないのだが、イルカは確かに、普段とはまるで異なるとろけた表情で犬扱いを受けていた。

格上の人間の、それも同性として太刀打ちのできない大ききをした男根でもって顔を引っぱたかれて、どうしてこんな。これもきつとなんらかの瞳術を使われたに違いないと、イルカは己に言い聞かせていた。そうでなければ。そうじゃないとすれば、ここまで惨めな状況でペニスを硬くしているなんて、ただの変態になってしまっただけだった。

「舐めろよ、犬」

「くう……っ♡」

冷たい声色に、ぞくりと背筋を痺れが走る。ほら、やつぱり。こんなの絶対幻術かなにかだ。だって酔っぱらったみたいに気持ちが良いくて、眼前の巨根がとても、とても扇情的に見えてしまう。そういう風に仕向けられているのだ。

だから、仕方ない。抗えなかったのだから、これは不可抗力だから、と無理な言い訳をこねくり回し、とうとうイルカは内から湧き上がる衝動に身を任せてしまった。屹立したカカシの性器に手を沿わせ、ちろりと舌先を出しては擦りつける。

「ん……ふ、へたっぴ……♡ あーでも逆に興奮する……♡ これ、もしかして初フェラもいただいちやいましたかねオレっ♡ 男慣れしてないあなたの♡ 初めのご奉仕もらえちゃうなんてラッキーすぎ……♡ ほら頑張つてビギナーちゃん♡ れろれるろして、しゃぶしゃぶして、ご主人様にご奉仕して……？♡ そうそうそうそう、ただでさえ経験不足なんだから可愛いお顔歪めてえ、えっちなお顔でちんぽしゃぶつ♡ 使用済みキャンディバー♡ 頬張っちゃって、かーわいの……♡ こおのすけべっ♡ すけべ♡ すけべ犬……っ！♡ メスちんこ勃起してるのを見せてますよ変態♡ なあんだ、あなたってほんとにこういうの大好きなタイプだったんですねえ意外♡ むつつり助平つてやつですかあ……♡」

「ふむうううううっ♡ うんっ、ん……!♡」

面白がっているかのようにやたら喋るカカシは、イルカの頭をわしわしと撫でまわしている。これじゃほんとにペットの犬だ、と思いはするのに、肉棒を舐めしやぶり、銜える動きが止まらない。性器からカウパーが溢れるのと同期して、じわりと口に涎が湧き上がる。それを懸命に擦りつけて、イルカはカカシの雄を愛撫した。

「っん、イキますよ♡ 出る……っ!♡」

「うあ!♡」

一応予告はしてくれたが、直前すぎて意味がない。イルカの顔に向けてカカシは射精し、びゆる♡びゆる♡びゆる♡と断続的に白濁を浴びせていく。陰茎を握って狙いを定めたうえでのことだったので、イルカの顔面にはほぼすべての精液がぶち当たり、いやらしい軌道を描いてばた、ばたと床へ落ちていった。

「ふふふっ、ザーメンまみれでかーわいそ……♡ ねえ、綺麗にしてあげましょっか……♡」

「ひ……?♡」

唐突に、ずっと着たままだったインナーを引き抜かれて全裸にされる。それから体温が離れていって、カカシが少し距離をとったのが分かった。

反射的に上向いたイルカだったが、未だに己の顔の方へ、カ

カシがペニスを向けていることにぎよっとする。しばらくしてもそのままだったのでどうしたものかと思っていると、カカシがくいくいと指を曲げ、竿を掴んでいない側の手でこちらの視線を誘導しようとしているのが分かった。

イルカが気付いたのをきっかけに、色っぽいほくらが印象的な口元へとその指が持ち上がる。ゆっくりと音もなく開閉される唇は、やけに淫らな雰囲気だった。イルカはついつい引き込まれて、彼の言わんとすることを無意識に読み取ってしまう。

(か・け・て・あ・げ・る……!?!♡)

「あ、あ、う……っ!♡」

「あはは、ちゃんと読唇術もできてお利口なわんちゃんだあーね♡ なにを、だなんて野暮なことは言わないでしょ?♡ さあご主人様に可愛がって欲しかったら♡ おねだりしてみてよメスわんちゃん♡ わんわんって鳴いてさあ♡ なにして欲しいか、大きな声で……♡ オレに向かって言ってみて!♡」

相変わらずカカシのご立派な肉棒はこっちに向けられていて、尿道口がはつきりと愛玩犬の顔を狙っている。かけてあげる、などという主語のあいまいな言葉、その意味をどうしてただか、イルカは確信できていた。

もしくは、そうであればいいと、心のどこかで欲していたのか。答えはもはや、本人にも分かりはしない。露骨なフレーズを口にしてねだったなら、すぐさま褒美が与えられてしまったのだから。

「サンプルは以上です！ 読んで頂いて有難うございました。これでもいい半分くらいで、残り半分もほぼほぼ淫語エロです。」
以下 R-18 シーン抜粋←

※教室で強制自慰妄想描写

小水を浴びせる？ 外で飲ませる？ 耳に飛び込んできた言葉があまりにも刺激的すぎて、イルカは小さく息を吐く。これがイインだろ、と教え込むようにぐぼんっ！♡ぐぼんっ！♡と力強く肉棒を押し込まれ、日焼けした身体が跳ねるみたいに仰け反った。ぱち！♡と瞬く視界のなか、イルカは見慣れた風景の幻を見る。

誰もいない、夕暮れの教室。

戸締りを急ぐイルカのもとへ突然現れる、銀髪の男。

声をかけられるその前にこくりと喉が鳴ったのは、この先を想像したからだ。彼になにをされるか自分はどうに分かっているし、それに逆らえないということも。身に染みて、分かっってしまうている。

『せんせー……♡』

へらへらした態度で、カカシが近づいてくる。

並んだ机の間を縫って、黒板の前、棒立ちになっているイルカの頬を撫でた。

キスでもするような素振り顔で顔を近づけるが、ふいとその軌道がイルカの耳元へと逸れる。

『お・す・わ・り……♡』

『はうん……♡』

上下関係を叩き込むような、淫靡な響きで一気に腰が砕けた。イルカは甘えた声を上げて、へなへなへと床へ座り込む。内股ぎみに膝を崩し、両手をその前でびたりと揃えると、”待て”を覚えさせられた雌犬のポーズができあがった。

『これ欲しい？♡』

は出せない。教師の聖域でもある大きな机の上、そこを自慰のためのステージにして勃起しているのは、まぎれもなくイルカ自身なのだから。

硬く張り詰めた雄から溢れ、漏れ出た我慢汁で、ぬるぬるぬるとよく手が滑る。

『ほんつとにあなたつて呆れるくらいのだすけべだよね♡
 ザ・堅物つて顔して授業しといて、オレとふたりつきりになつたらもうこれだもの……♡ 子供たちのための教室で♡
 わざわざ教卓の上ですつぽんぼんで乗つかつて、お股開いてオナニーショーして悦んじやうだなんて♡ この淫乱教師♡
 えつちな先生♡ ほらあ膝立ちになつて、先生様のイカレ勃起ちんこの勃ち具合どうぞつてオレに見せなさいよ♡ そうそう、そう♡ お股突き出してどーぞ♡つて……♡ うん上手、じよーずね♡ んーよく見える、本当バツキバキで、どろどろで♡ 気持ち良さそう無毛おちんちんでちゅねー♡ はいもつと気合入れてしごいてつて♡ 全裸ちんこキショーでおねだりでしょ？♡ おーねーだーりっ！♡』
 『ふひいひいひいひいんんん……っ！♡ んなっ、ことお、言われてもおおおお……っ♡』

いやいやとかぶりを振りながらも、膝立ちになったイルカは、股間をカカシの方向に突き出したままマスターベーションを続けている。ぎゅつと目を閉じて行為に耽っているようで、と

きおりそつと瞼を開いては、カカシの視線が自分に注がれていることを確認してごきゅんと喉を鳴らしていた。

ペニスを擦る動きはだんだんと派手に、激しくなり、それこそ痴態を見せつけようとしているかのようだった。火照った肌の上を、新たに目尻に滲んだ温い涙がつつたつていく。

『カ、カシさ……っ♡ ください、今すぐ……っ！♡ 俺っ、俺え、真っ裸でっ、教室で……っ！♡ いつも授業してる机の上に乗つかつてっ、変態オナニーで勃起ちんこどうぞつてお見せしてますからああああああ……っ！♡ ちんちんシヨシコして悦んじやつてる変態さんなどこっ、ご主人様にいつばいお見せしてますからああああああ……っ！♡ イルカのおつるつるパイパンちんちん♡ じーつて、じーつて見てくださつていれすからああああああ……っ！♡ っ！♡ だからお願いっ、ください、ください……っ♡』

※カカシ&第七班メンバー（中身はカカシの影分身）×イルカで5P妄想描写

睦言のようできて、浅ましさを責められてしまっている。その指摘の内容も、まるで頭の中を覗かれているみたいでまったく良くなかった。そうやって直接言葉にして聞かされたら、ま

たむらむらと変な気になってしまふ。

イルカの脳内では今まさに、危険なイメージが展開されているところだった。

いったいどこなんだか知りもしないがとにかくだっ広い板張りの部屋で、大勢のカカシに輪になって囲まれてしまっている。

数が多いものだからどれが本物のカカシなのか皆目見当がつかないけれど、腕を組んで立っていたり、しゃがみ込んで頬杖をついたりする彼らがみな一様に見つめているのは、輪の中央にいる全裸のイルカだ。

一糸まとわぬ姿で膝立ちになっているイルカは羞恥に耳まで染めながら、股間を両手で隠している。

『なんで今更隠すのさー』

『全部見せてよお、イルカ先生！』

『カカシさんのバカ……っ！♡ こんな、こんな無理ですって……！♡』

人数に圧倒されてしまい、さしものイルカも身が竦む。そんな様子を見て、カカシのうちの何人かがこそそこそと小声で相談をし始めた。

『じゃあね、お手伝いしてあげますよ！ オレってほんと優しい彼氏〜』

『ひえ……♡ ちょっと、ちょっと待ってください……っ！♡』

四人のカカシが前に出て、イルカにのそのそ近づいてくる。呑気に歩いていたかと思えばひとりは素早くイルカの背後へ回り、あつという間に羽交い絞めにしてしまっていた。残る三人はイルカの左右と、正面、というか股の間に陣取っている。

『はいどうぞ！♡ さあイルカ先生、おしっこして♡ ね、オレ応援してあげる♡ 頑張れ頑張れイルカせんせ♡ 彼』

『あ、そうだ！♡ おっぱいいいじってあげましょうか、その方が雰囲気出るかもですよね♡』

『あつズルいオレもいじる！♡ じゃ一個ずつね♡ 左乳首はオレもーらい♡』

『ちよつと、ちよつと、ちよつと……っ！♡』

ずいずい迫ってくるカカシたちに気圧されながらも、イルカはなんとか逃れようと試みる。何本も手が伸びてきて、暴れるイルカを掴んで宥めた。

『もー強情だなあ……♡ そんな子にはちよこつとお仕置きしちやいましようか♡ だってあなたが悪いんですからね、オレの言うこと聞かないから♡』

『あはは、お仕置きだお仕置きだ♡ まあね、あなたのことだから結局気持ち良くなっちゃってむしろ褒美になってたり

して♡』

『それはそれでま、よしとしましよ♡ では……変化!♡』
『!?♡』

ぼふん!と煙が舞ったかと思うと、その場に現れたのはナルト、サクラ、サスケの三人組だった。背面にいるカカシ以外の影分身が、子供たちに変化をしたのだ。

『ちよつと、カカシさん……!?♡ いくらなんでもそれは、それはさすがに……!♡!♡』

『まあそう固いこと言うなつてばよ♡』

『わ、悪ふざけが過ぎま……つ!♡ んんんつ、んんつ!♡』
上忍の変化なのだからチャクラの気配まで本人そっくりで、口調まで真似されてしまえば本物と見分けなんてつかない。ニシシ、と笑つて直接身体に触れられて、イルカの肌がすぐさま粟立った。

『カ、カシさんほんとにこれは……つ!♡ おこ、怒りますよ俺つ、んんん……つ!♡!♡』

『いやいやいやい眺めですよほんつとに♡ 現役教師がねえ、元生徒と……♡ はは♡ 背德的で、絶景絶景♡』

『イルカ先生教えてくれよー♡ どうやったら気持ちいいんだよ?♡』

『あなたを裸にしたらこんな風になるんだな……♡ 下の毛がないのはカカシの好みか?♡』

『こんなに近くで男の人のあれ見るの初めてで……!♡ すつごくドキドキするうつ♡ すごいですね先生つ、なんかこっだけ別の生き物みたい♡♡』

声のトーンだけ聞いていたらまるで遊んでるみたいな調子で、子供たちがイルカにペッティングを施している。少年二人はにやにやしながらイルカの乳首を片方ずついじり、サクラはイルカの股の前に座り込んで、キヤーキヤー言いながらペニスをつんつんついついてる。

たとえ本物の本人じゃないと、全部カカシの芝居なのだと分かっていたつて彼らの存在そのものはひどくリアルで、物凄く戸惑つてしまう。興奮よりは緊張が勝り、イルカの性器はまだ半勃起にも至つていなかった。

『んー勃ちがいまいちね……♡ それじゃあこういうのはどうかしら?♡』

中身は大人なのだから当然なのだが子供らしからぬことを呟いて、サクラがカカシに耳打ちをする。そだね、と短く応じて鎮くと、カカシはイルカを羽交い絞めするのを止めて、床に仰向けに転がした。速やかに両手を地面に縫い留め、抵抗できないようにばんざいの形で拘束する。

『さあて……♡♡』

『待てサクラ!♡ カカシさんつ、もうやめましよう……!♡ なんてもしますから、これだけは!♡ ねえ、もうやめ

てくださいい、お願い……！！♡ お願いしますからっ！！♡』

カカシに懇願するのに必死で、イルカは今この場でなにが起きているのか正確に理解できていなかった。こんな状況に子供たちの姿があること自体が耐えられなくて、意図せず彼らから視線を外してしまっていたのだ。

頭上のカカシに話しかけているイルカを横目に、サクラはするすると、長めの上衣の下に穿いていたスパッツを下着もろとも脱ぎ去っていた。そうして股間だけ裸になってしまうと、イルカの顔を両足で跨ぐ。

それからかううじて陰部を隠してくれていた上衣の裾を、自らめくりあげていったのだった。

『イ・ル・カ・セーんせ♡ 私くらいの子供のここ、先生は見たことあるーう……？♡』

『な……っ?!♡』
声に反応してそちらを向くと、そこには桃色の薄い陰毛に覆われた、サクラの秘部が丸見えになっている。イルカは一瞬目を見開いたが、すぐさまぱっと顔を背けた。

『やめなさいサク……じゃなかったカカシさん！♡ いくらなんでもひど過ぎますこれは！』

『まーまーまーイルカ先生♡ 黙ってりやだーれも傷つきませんから、ね？♡ ガキの頃からいるーんなもん見せられてきたオレの人生の経験値、すこーしあなたに分けてあげた

いってだけなんで♡』

『そ、それにしたって……！！♡ ひえっ！♡』

『はい、先生どーぞ♡ せえのっ、ばかー……っ！♡』
声色は明らかに幼いそれなのに、サクラの表情は妖艶だ。加虐的な微笑みを浮かべると、少女はがに股ぎみになって己の大陰唇を割り開き、恥部の中身をイルカに見せつけたのだった。

なんとかそれが視界に入らないようもつと顔を背けようとするのに、新たなカカシがもう一人加わって、イルカの頬のあたりを両手で支え、サクラの股と向き合う角度にしつかり固定してしまふ。臉を閉じれば良かったのだが、むわん、と漂うメスの香りに、女慣れなどしていないイルカの思考は完全停止してしまっていた。

『私イルカ先生的こと大好きだから、ちよつびりサービスね♡ いいものを見せてあげる、ふふ……♡ んんん、んっ♡』
『や、やめ……っ！♡ やめなさい、やめなさいサクラそんなことは……っ！♡ んぐうっ！♡』

細い、いかにも女の子らしい指先が伸ばされて、まだ小さな陰核をこり♡こりり……♡と刺激だす。自慰を始めたのだと気付いたイルカは思わず声を張り上げたのだが、みなまで言い切ることすらできなかった。

イルカの下肢にはナルトとサスケが絡みついて、ほぼほぼ完

勃ちになりかけている陰茎を二人で仲良く愛撫している。それぞれ違う方向から子供サイズの舌べろで性器を舐められ、イルカはかすかに悲鳴を上げたのだった。

『あはあ……♡ イルカ先生だつてやつぱり男の人なのよねえ♡ ここ見せられたら、やつぱり生徒のでも釘付けになっちゃうんだあ……♡ えっちなえ♡』

『ち、ちが、ちが……っ♡』

首を横に振って否定しようとしても、カカシに押さえられているのでうまくいかない。しかしサクラのそこから目を離せなくなっているのも、確かな事実ではあった。

サクラはがに股の角度を調節して、イルカの顔面に局部を近づけたり遠ざけたりして遊んでいる。くばあ……♡と柔らかい肉を割り開き、小陰唇のひだを指で器用になぞってみせて、やや勃起し始めたクリトリスでイルカの鼻先にキスマでしてみせた。

もうほとんど触れてしまうくらいの距離でくば♡くばあ♡くっつば♡くばあ……♡と小ぶりの女性器が開け閉めされると、いつの間にか溢れ出た愛液が時間をかけて行き渡り、くちゅん♡くちゅん……♡と湿った音を立てているのはつきり聞こえてきてしまう。透明な淫汗はほの赤い媚肉に潤いを与え、あちこちで糸を引きながら、卑猥な絵面でイルカをどんどんと追い詰めてくる。

『……っはあ、はあ、サクラ、サクラ……っ！♡ いけない、こんなの、やめなさい、違うんだ……っ！♡』

『なにが違うのよう今だつてがっつり見てるじゃない♡ あ、気持ちいい、気持ちいい、イルカ先生に大事なところ見られちゃったら気持ちいいよ……♡ ん、んう、濡れてきちゃった……♡ ね、私の女の子のところ、おクチばくばくしちゃうてるの分かるう？♡ 先生……っ♡』

『や、やめ、やめてくれサクラ頼むっ、こんなのだめだ、こんなの……ふぐうっ！♡』

イルカが最後に見ていたものは、サクラ自身が言う通り、ばか♡ばか♡といやらしく唇を開け閉めする膣口だった。ピンク色のそこからじわじわ♡じわわ……♡と透明な蜜が溢れ出てくるさまはいかにも官能的で、すでにカカシの手が顔の固定をやめているにも、イルカは気付けずにいたのだった。

そして視界が唐突に闇に落ちたのは、サクラに乗っかられてしまったからだだった。ぬちや♡と水っぽい感触がしたこと、顔面騎乗をされているのだと悟る。

『っああこれいい気持ちいいっ！♡ イルカ先生のお顔で私のメスのところ……っ♡ こするの、気持ちいいっ！♡ ぬるぬるするのっ、これっ、私のいけないおツユ……っ！♡ 濡れちゃったのおっ！♡ サスケ君の前でっ、ナルトやカカシ先生の前でえ……っ！♡ イルカ先生にお股見せて私感じ

ちやったのおおおおお……っ！♡

『むぐうううう、ふぐうううううう……っ！♡』

ぬっちゅ♡ぬっちゅ♡ぬっちゅ♡ぬっちゅ♡と、サクラが腰を前後することに耳を覆いたくなるような水音がする。顔面を愛液まみれにされ、ふりふりとした陰部の肉で往復されるだけでもたまらないのに、サクラはそこから、さらにもう一歩行為を深めてきたのだった。

ぐっぱあ♡と大陰唇を左右に割り開いて、イルカの鼻をまることが包む。そうして充血した陰核をそこで何度も刺激し、たつぷりと淫液を蓄えたヴァギナとイルカの唇とで、ぶっちゅん♡ぶっちゅん♡とディープリキスを繰り返した。また、イルカの鼻先を膣に挿入させ、乱暴に腰を使って疑似的なセックスまでしてみせる。

そのうえ、『ああんっ！♡ 先生、イイよおお……っ！♡ 私、女の子じゃなくて女になっちゃうっ♡ みんなの前で、イルカ先生に女にされちゃうっ♡ まだまだ胸もぺったんこなのにつ♡ 下だけえ、お股だけっ、イルカ先生の女にされちゃうよおおおおおお……っ！♡』などと、ポルノまがいのことを大声で口走るのだからひどいものだった。

そこだけ聞いていれば、まるでイルカが彼女に無体を強いているようだ。実際は逆で、寄つてたかつて性的に悪戯されているのは、間違いなくイルカの方だというのに。

※子カカシ&暗部カカシ&カカシ×イルカ、イルカ×子カカシ
♀で5P妄想描写

「あらら、腹に当たるザーメンが減ってるなど思ったら……♡
♡ メスイキですか先生♡ ミルクレスでアへっちゃう高みへ到達しちゃいましたかあ……♡ もうあんた本物のメスです♡ だってこれ、初めてのセックスなんでしょ？♡
初めてだったのにね、後ろでイって、小便でもイって、それで連続メスイキ決めちゃうだなんて……♡ ほんと、誰かに勘づかれてなくて良かったですよ♡ あんたに目をつけたのがオレで良かったですよ♡ めちゃめちゃ淫乱じゃないですかあんな♡ こんなんで教職とかよくやれてたねっもんです♡
♡ ちんぽ大好きザーメン大好き、すけべな妄想大好きなくせにね……！♡ まあそんなところも可愛いし愛してますよ♡ オレにだけは、そういうところもたくさん見せてください♡ オレ、写真もできるんで今度あなたの写真が撮りたいです……♡ 普通に笑ってる写真も勿論いいんですけど、ストリップしてたり、オナってたり♡ ちゃぶ台の上にコップ置いて、そこにちんこ突っ込んでしゃがんだポーズで全裸ダブルピースしながらしょんべんしてたりとか♡ あと、オレ

のちんぽブツ込む前と後で、アナルの見比べがしたいです……

♡ 使用前のきつきつまんこと、巨チンに食い散らかされたあとの、真っ赤に腫れたぬるぬるゆるまん♡ 四つん這いになったあんた自身にケツ肉ばーりーっくり開かせて、オレはモロ出しになったおまんこ穴つんつんつきながら超至近距離で撮影しむんです♡ 写真のサイズいっぱいになっちゃうくらいどアップで撮ったイルカ先生のぽってりおまんこ♡ かーわいいんだろぅなあ♡ 透明な張り型入れて、中身丸見え状態でも撮影しましょうか♡ ピンクのおまんこ肉じろじろ見られながらシャッター切られたりしたら、あなたあん言っていきまくっちゃうんでしょね撮影されてるのに♡ ああそうか、張り型じゃなくってオレの指の方がきつと興奮しますよね！♡ じゃあこうしましょう、影分身いっばい出すんで、何人ものオレに囲まれながらぶすぶすまんこに指突っ込まれて、360度フルオーブンメス穴の写真撮られちゃつてください♡ まんぐり返ししてぐっぽあああああああ……♡ ってまああるくケツ穴拡張られちゃって、顔真っ赤にして恥ずかしがってるあなたと片手でピースしてる満面の笑みのオレ十数人で記念撮影しましょうね♡ そのまま乱交になだれ込んで、はちゃめちやなセックスしていっばい撮影会しましょう♡ おても脇も口も勿論おまんこも、オレにちんぽ突っ込まれてあうあう言ってるあなたの姿♡ 二輪挿しとか

肉体的にヤバいのもいいんですけど、倫理的にヤバい方がどっちかってとあなたも燃えてくれますかね……♡ んじやガキの頃のオレとやってもらいましょうか♡ 上忍なりたての十代のオレ、暗部装束姿のはたちぐらいのオレ、そんでいつものオレと……♡ あとそうだな、女体化した子供のオレのアソコに挿入しながら5Pってのもなかなかオツですよえ♡ まだちっこいガキだった上忍のオレにおまんこパコパコされながら女の子のオレのまんこ犯して、暗部のオレといつものオレと、ふたりぶんのちんぽ無理やり口に銜えさせられるあなたですつごく可哀相♡ イルカ先生って、女の胸はある方が好きですか？♡ 女の子だったらちっちゃい方がそれっぽいちやそれっぽいかなあ……♡ どつちでもいいんですよ、イルカ先生のお好み通りに♡ ちっばいでも、ぶるんつぶるんのかパイでも、お好きなように化けてあげる♡ あなたの教え子くらいの年代のオレのこと、生で犯してくださいね♡……」

奥付

「童貞だって言ったじゃないか！」

【発行日】 2021年05月22日

【発行者】 みたいわ南国

【発行】 南国飯処（み）

【印刷】 株式会社ポプルス

【連絡先】 mitaiwanangoku@gmail.com

【pixiv】 <http://pixiv.me/mitaiwanangoku>

【twitter】 <http://twitter.com/MitaiwaNangoku>

【BOOTH】 <https://kakkomi.booth.pm/>

表紙イラストは IMOMI さま (@imopote1003)、
表紙デザインは 3 こさまにお願いをさせて頂きました！
有難うございました！

◆ネットオークション、フリマアプリ等での転売はご遠慮ください◆

「じゃあこうしましょ、 今度イルカ先生の恋バナ聞かせてもらえませんか？」

中忍試験での言い合いもあったものの、
なんだかんだで飲み友になったイルカとカカシ。
なにやら流れて過去の恋バナ(という名のフラれ話)を
披露するハメになったイルカだったが、
突然そんなリクエストをしたカカシの真意とは——!?



◆この本には以下の内容が含まれています◆

淫語/♡喘ぎ(受けも攻めも)/羞恥プレイ/言葉責め/兜合わせ/
アナル舐め/スパンキング/連続潮吹き/失禁/ペニスでビンタ/犬プレイ/聖水プレイ/
お便器プレイ/電気あんま/教室で自慰強制/剃毛/陰茎振り・回し/ダブルピース/
イラマチオ/ひよっこフェラ/影分身と一緒に乱交/公開セックス/性教育プレイ/
二輪挿し/温泉洗腸/孕ませ妄想/結腸責め/連続メスイキ/
アナル静止画撮影/精液排泄/ザーメン提灯/

※カカイル前提の妄想ですが
具体的な7班メンバー(中身は変化中のカカシ)× イルカ
の描写があります※

・サクラ× イルカ

(羞恥プレイ/言葉責め/淫語/陰部・自慰見せつけ/くばぁ/顔面騎乗/
イルカの顔面で自慰/聖水プレイ/アナル舐め/SP/ぶっかけ/)

・ナルト&サスケ× イルカ

(羞恥プレイ/言葉責め/手コキ/Wフェラ/聖水プレイ/アナル舐め/SP/ぶっかけ/)

※カカイル前提の妄想ですが
具体的な子カカシ× イルカ、イルカ× 女の子カカシ(両方とも中身は変化中のカカシ)
の描写があります※

・子カカシ× イルカ

(4P/聖水プレイ/ハメ撮り/)

・イルカ× 女の子カカシ

(4P/ハメ撮り/中出し/顔面騎乗/顔面に中出し精液排泄/クンニリングス/顔面放尿/)